

レイコとマット②

先人の知恵 時経て開花

白道のカミミノー便り

仕事場でお互いに焼きもの作りの手を動かしながら、礼子さんの話を聞いた。

彼女が大和中学の生徒だった時、外国人数名の学校訪問があった。それぞれ異なった国の人たちで、強烈な印象だった。彼らの話に興味を持ち、次から次に質問したそうだ。それ以来、ずっと外国に行く夢を抱き続けた結果がシドニーにつながったと笑った。

礼子さんの実家がある美郷町宮内では、彼女が通った小学校が解体され、お店もなくなった。一緒に学んだ友人たちも、ほとんど村を出て帰郷する者もない。

過疎化していく村について、あまり良い材料はないが、それは美

郷に限らない。熊本大学の徳野貞雄教授の統計によると、明治維新までは日本の人口は3500万人

で、その後100年間に1億2千万人へ増えた。ほぼ100年後の2100年ごろには5千万人減って、7千万人になる予測らしい。

途上国の人口は爆発的に増えているが、日本の人口減少は世界の流れからして自然な成り行きともいえる。

僕たちは超元気なお年寄りについて話をした。その勢いを買って、隣の90歳のラストサムライ（大住さん）を表敬訪問した。

配達された大住さんのお弁当を見て、礼子さんが言った。子供の頃、お年寄りのために公民館で弁当作りをした。当時、地域のおばさんたちに教えてもらったことで、今でも役に立っていることがあると言う。山芋を料理する時、手がかゆくなったら酢水で洗えばいいということだ。

子供の頃、礼子さんの記憶の片隅にまかれた小さな種がシドニーで花開いた光景を思い浮かべていた。



大住さんをはさんと写真に納まる2人＝筆者撮影